

イクロム国際建築修復コース

ローマにあるイクロム（International Centre for The Study of The Preservation and Restoration of Cultural Property）が1996年1月24日から5月31日にかけて開催した1996年度国際建築修復コースに参加した。コース全体を通しての参加者は18名で、随時数人の短期参加者があった。参加者の母国はヨーロッパが主体で、アジアからの参加は1名のみであった。例年度にくらべて、東欧圏および中東諸国からの参加者が目立った。

コースは18週間からなり、以下のように週毎にテーマが設定されている。

第1週：修復の哲学と概念／第2週：構築物と遺跡の保護に関する国際情勢／第3週：文化遺産の記録／第4週：歴史的建造物の概要／第5週：構造および材料の劣化原因（予防と対策）／第6週：調査・分析、修復・管理／第7週：検査・調査事業、遺跡管理／第8週：劣化過程・予防と対策の原理／第9週：劣化の原因とメカニズム（土・石・モルタル）／第10週：劣化の原因とメカニズム（石・ブロック・モルタル）／第11週 劣化の原因とメカニズム（金属・コンクリート・近代の材料）／第12週：表面の修復原理／第13週：予防措置、歴史的建造物内の博物館と陳列品／第14週：実験／第15週：考古遺跡、文化的景観、歴史的庭園／第16週：都市と田園の修復／第17週：研修旅行／第18週：文化遺産における保存理念・哲学、新しいタイプの対策・再生

参加者は以上の講義を聞くだけでなく、発表・討論・演習というかたちでコースに関わる。日本の文化財の調査・保存に関して「阪神大震災における伝統的建造物」、「木造建造物の調査・記録方法」、「遺跡の発掘と整備方法」、「奈良市における町並と埋蔵文化財の保存に関わる諸問題」と題した発表をおこなった。日本の現状は、ヨーロッパを中心とした国々とはかなり異なっており、他国からの参加者の興味をひき、日本の文化財保存の現状についての誤解を解くこともできた。概して、各参加者とも、講義よりも参加者の発表に興味をひかれたようである。

実習では、対象物に面した際の視点・調査方法・評価方法が参加者によって異なっており、そこには各国の文化財に対するアプローチの方法が反映されており、興味深かった。また、世界各国からの講師・参加者間で、各国で保存上直面している諸問題の処理方法について論じ、互いに学ぶべき点が多かった。とはいっても、各地域・各国の文化財に対する価値観・評価基準、修復方法・活用方法、強いては保存のプロセス・その嗜好にみられる国民性もそれぞれ固有の文化であり、文化財保存に関する世界一律の基準づくりはかなり困難であると感じた。そこで、文化財保存の国際協力においては、自国の保存哲学・方法論を主張するだけでなく、相手国の国情、歴史、国民性等をも考慮した活動が必要であることを再認識した。

コースにおいて西欧の保存・修復方法を学ぶと同時に、修復・活用された文化財を実見した。科学的・工学的な処理方法については、イクロムで学んだ技術が使用されている。しかし、修復や活用方法については、西欧の伝統的な保存理念との矛盾をしばしば感じた。現実には、活用を主眼においたダイナミックな改造もなされている。いずれの国においても、文化財の保存は現社会とのかかわりなしには論じられないということであろう。残念ながらイクロムではそのような視野に立っての講義・討論が少なかった。理念のみが先行し、ややもすると実際の保存から遊離してしまっている点も否定できない。参加者からも、一部の現実的問題と遊離した講義内容や講師の態度に対して批判的な声が聞かれた。このコースが、主として技術的問題を扱うことを主眼としているのもその一因ではあった。しかし、来年度は、試みとして「世界遺産都市の保存」というコースが開催され、現代社会のなかでいかに歴史的都市を保存するかが議論されるという。

（島田敏男）